

地域の多職種が連携

食16べたいを支える+ ■下

鼻から管を通すと、モニターに八十七歳男性ののど奥が鮮明に映し出される。男性がゼリーを一口のみ込む。「いい感じで食道に入ったね」。嚥下内視鏡を使って、のみ込む力を確認する検査。画面をのぞき込んでいた歯科医師や言語聴覚士、看護師らが、ほっとした表情を浮かべた。

男性は一月に名古屋市内の病院で心臓手術を受け、自宅がある同市昭和区の「かわな病院」に入院。以前から、右半身に脳梗塞によるとみられるまひがある。のみ込む力も弱く、腹部に開けた小さな穴に管を通して栄養分や水分などを補給する胃ろうをしてきた。

「口から食べて、自宅で過ごしたい」。本人の希望は強かったが、病院にはのみ込みの回復に詳しい医師や歯科医師がいない。そこで、この分野で病院と連携している坂井歯科医院（同区）の坂井謙介院長や、在

宅療養を支える管理栄養士が病院を訪れ、男性ののみ込む力を検査して対応を話し合った。

「声帯の近くに唾液がたまりやすくなっている。気管に入らないよう、せきの練習をして」。外出が難しい高齢者ら向けに訪問歯科診療に取り組んできた経験に基づき、坂井さんが注意点を説明する。状態は人によって異なるが、検査によって男性の場合、ゼリーはのみ込めても、おかゆは気管の入り口に残りやすく、誤って気管に入り込む危険性が高いことも分かった。

かわな病院リハビリテーシヨンの言語聴覚士、重松沙哉佳さん（左）は「連携によって、必要なりハビリの内容が分かった。在宅になっても安全に食べられるよう支援していきたい」と意気込む。男性は現在も入院中だが、リハビリを続け

て好きな水ようかんも食べられるように。訪問看護な

在宅目指して

どを活用した在宅療養に向けて、準備を進めている。

病院と坂井さんら地域の歯科医師や在宅療養に詳しい開業医らが、重いのみ込み障害のある患者の支援を連携して探り始めたのは昨年十月。愛知県の在宅医療連携拠点推進事業で、医師や歯科医師、薬剤師、看護師、ケアマネジャーら多職種が「食」をテーマに、在宅での連携を話し合ったのがきっかけだ。

坂井さんは「できることが限られるお年寄りにとっ

て、食べることは大きな楽しみ」と強調する。だが、食べ物や唾液が誤って気管に入り、誤嚥性肺炎を起こす危険性は低くない。このため、重いのみ込み障害のある患者が、口からの食事を担当医に禁じられるケースもある。

病院で二月にあった症例でも、脳出血の後遺症でののみ込み障害のある七十代男性の経口摂取に、担当医は困難と判断。しかし、本人の「食べたい」という要望をかなえようと、坂井さん

は内視鏡検査を訪問看護師やケアマネジャーらと実施。看護師の管理下という条件で担当医の了解を得て、少量のゼリーを薬しみて、程度に食べることができた。坂井さんは「患者さんが少しでも食べられるよう、残された可能性を見つけて引き出したい」と話す。

入院先訪れ、可能性探る

十月には、市の事業で、区内の在宅医療連携の支援拠点がかわな病院に新設される予定。食べることの支援や栄養管理にも力を入れる。在宅医療や在宅看護に



のみ込む力を把握し、適切なリハビリや食事指導に生かすために行われる内視鏡検査＝名古屋市昭和区のかわな病院で

ついて医療・介護従事者からの相談を受け付け、医師会や歯科医師会などを通して、摂食や嚥下、栄養管理を支援できる専門職につないでいく。

新たな拠点の運営を担うケアマネジャーの高野雅子さんは「食べることを支えようと、個別に活動してきた専門職が培ったノウハウを、他の医療・介護従事者にも広めていきたい」と話している。（林勝）

つなごう医療

264

中部の最前線